

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

留学体験記： フィレンツェ

* 私の人生を広げてくれたイタリア留学 *

宮田 賀江

昨年暮れ、5ヶ月間のフィレンツェでの語学留学を終えて帰国しました。私がまさかイタリア留学できたなんて！といまだに夢のようです。それまでは仕事が忙しくて留学なんて絶対に無理だったのですが、昨年ようやく夢の第一歩を踏み出すことができました。

イタリア語を勉強し始めたのは約10年前。一本のイタリア映画を観たことがきっかけでした。ジュゼッペ・トルナトーレ監督の『Nuovo Cinema Paradiso』。ストーリー、音楽、そしてイタリア語の響きの心地よさ、とにかく全てに感動し、イタリア語に興味を持ったのがきっかけです。



【寿司とパスタの日伊交流 Festa】

はじめはNHKの語学講座で、そのうちにもっと本格的に勉強してみたいなという思いから日本イタリア京都都会館の講座に通うようになりました。

通い始めて1年経った頃、クラスメイトがフィレンツェに留学したので、もう一人の友人と遊びに

行こうとイタリア旅行に。勉強の甲斐あって面白いぐらいに現地の人たちと話ができ、友達も沢山できて、本当にイタリア語を勉強してよかったなあと友達と2人大満足でした。

そのうち仕事が忙しくなってきた、全くイタリア語を勉強することがなくなりましたが、イタリアに対する想いは強くなる一方でした。2年ほど前、5年ぶりのイタリア旅行に行ったおり、言葉は以前、勉強していたから大丈夫と思っていたら、空港に着いてバスに乗りたけれど「Dove…」から先の言葉がでてこない…。前回の旅行ではあんなに話せたのに…。と本当にショックでした。

それでも、旅をしているうちに少しずつ単語を思い出して話せるようになってくると、もう楽しくて楽しくて…やっぱりイタリア語が大好きで、もっと勉強したいという気持ちが強くなっていました。しかも、できれば今度はイタリアで…！

ちょうどその頃、なにか仕事につながるようなことを身につけたいな…と、それならば大好きなイタリアで何か勉強できないかと考え始めていました。ただ、興味は色々あっても、本当にやりたいことは何なのか、漠然とした思いだけで方向性が決まりませんでしたので、思い切って日本イタリア京都都会館に相談に行きました。

すると、まずは1、2ヶ月でも短期で留学して現地の様子を見てきてはどうか、というアドバイスをいただいて、昨年4月末にまずは1ヶ月の語学留学。イタリアならどの町も大好きで、どこの学校に行こうかと迷っていたのですが、フィレンツェにあ

る LINGUAVIVA ならしっかりした学校できっちりとした授業が受けられるということで、この学校に通うことに決めました。

初めての海外での生活。ドキドキしながら授業初日の5日前にイタリアに入りました。アパートは授業の前日からしか入居できないということだったので、その間は駅に荷物を預けて小旅行にでも行けばいいやと考えていました。ところが、駅の手荷物預りが意外と高くでしようかと…。大きなスーツケースをゴロゴロ持って旅行には行けないし、迷った挙句に思い切ってアパートの大家さんに荷物を先に預かってもらえないかと電話をしてみました。断られるかな～と緊張しながら電話をすると、『もちろん預かってあげるからすぐに来なさい』とのこと。家に着くと、『Ciao～!!!』と元気いっぱいニコニコしながら大家さんのお父さんが出迎えてくれました。こんなに大きな荷物を持ってかわいそうにと2階の部屋まで運んでくれて、イタリア語が聞き取れずにわからない私にゆっくりとわかるまで説明してくれ、私のつたないイタリア語もうなずきながら一生懸命話を聞いてくれて、『なんで遠慮しないでもっと早く電話してこないの！部屋は空いているから今日からでも使いなさい』と、あまりのお父さんの優しさと笑顔に、それまでの不安や緊張も吹っ飛んでしまいました。



【Marcello の友人たちと Pizzeria へ】

学校はサンタ・マリア・ノベッラ駅からすぐ近く、授業は朝9時から休憩を30分挟んで12時半まで。初日にクラス分けのテストを受け、レベル2に。授業はもちろんイタリア語のみで、先生はゆっくり話してくれるのですが最初は聞き取るだけで必死。授業が終わればぐったり。でも、授業は本当に分かりやすく何度でも説明してくれるし、とても楽しく、

何日かすれば耳も慣れてきて、だんだん楽に聞き取れるようになりました。

学校の外でも、近所のおじさん、パールやスーパーのおじさんやおばさん、たくさんの友達ができました。こうして1ヶ月なんてあっという間に過ぎてしまい、イタリア語にも慣れてきた頃に帰らなければならないなんて本当に残念！と感じるぐらい、この1ヶ月でイタリア語力は驚くほど伸びました。

そして帰国から2か月後、今度はビザを取って5ヶ月の留学へ。1ヶ月の留学中に、次の留学先のためにローマやポローニャなど色々な学校を見学に行ったのですが、結局、また LINGUAVIVA に戻ることにしました。そして、今度はイタリア語の勉強のためにイタリア人と住もうと思っていたので、家賃節約のためにも自分で住むところを探そうと、学校で紹介されるアパートは2週間だけにし、インターネットや掲示板で探し始めることに。学校の掲示板や、大学や駅の近くの掲示板にもルームメイト募集などの張り紙がたくさんでいるので、良さそうなところに電話をかけて部屋をいくつも見に行きました。それでもなかなか良い物件がなく焦っている時に、学校の友人のルームメイト兼大家さんの紹介で、彼の友人の家に部屋を見に行くことに。

すると、フィレンツェには古い家が多いのに、その家はとても新しくきれいで、なんとバスstubまで！シャワーしかついていないところがほとんどなので、かなりの高得点。でも、そのルームメイト兼大家さんは男性…。彼は裁判所で働いているということで、話してもおとなしくて真面目そう、でもイタリア人男性との2人でのシェアってどうなんだろう…。2日間迷ったのですが、紹介してくれた方もきちんとした人なので大丈夫だろうし、その私の友人のように男女でシェアしている人は多いということで、ネットなどの見知らぬ人よりは安心かなと、思い切って決めました。そして、そのルームメイト兼大家であるマルチェットとの生活がスタート。最初は男性とのシェアということで気を使うことも慣れないこともしばしば。特に、会話のためにと思ったイタリア語が大変で、初対面の時はおとなしく見えたのに、実際には喋る喋る！しかも政治に歴史と難しい話まで早口で！1週間もするとノイローゼ状態で、ついには『お願いだから話しかけないで…。』とお願いするほど(笑)。後

でわかったのですが、マルチェッロの友人達に言わせると、おとなしいのは最初の5分だけで、イタリア人の中でも最強の部類だと(笑)。

でも、イタリア人と生活するというのは大正解で、彼の家に決めたことは間違いではありませんでした。彼はシチリア島出身で根っから明るく、面倒見がよく、いつも私のことを気遣ってくれました。友人との cena や festa には必ず一緒に連れて行ってくれ、夏の間は毎晩のように彼の友人たちと gelato を食べにいったりして過ごしました。

9月になるとマルチェッロの mamma がシチリアから1ヶ月半ほど遊びに来ていたのですが、mamma はむかし小学校の先生をしていたということで、毎日のように宿題を見てくれたり、イタリア語を教えたりしてくれました。そればかりか、食事を作ってもらったり、イタリアの昔の暮らしを教えてもらったりと本当に良くしてもらいました。

学校の授業はレベルがアップしていくごとに難しくなり、始めの頃のように楽しんで勉強することができなくなって、気分が沈んだり体調を崩すことも度々ありました。そんな時はいつもマルチェッロが『ここはイタリア！飲んで歌って楽しいことだけ考えよう！』とゴハンに連れて行ってくれたり、話をきいてくれたりと、まるでお兄ちゃんやお父さん、本当の家族のように接してくれました。

今回の留学中に何かこれから進むべき道を見つけたいと毎日すごく焦っていて、興味のあることは無理をしてもやってみようと思っかけてました。興味のある銅版画の学校にも通い、帰国前にはCILS も受けたりと、あまりにも自分を追い込みすぎて何も見えなくなっていました。しかも、結局その何かを見つけることもできずに帰るのかと、落ち込んでいたのですが、それは大きな間違いで実は本当にたくさんものを得ることができたんだと気づいたのは、あの festa でのことでした。

帰国直前にマルチェッロが私のサヨナラ・パーティーをしようと言いだし、みんなへのお礼の気持ちで私が和食を作ることに。互いの友人をリストアップしていくと最後には25人に！CILSの翌日、帰国の3日前でもうへろへろになっていて、こんなに沢山も作れるのかとかなり不安だったのですが、『料理なんてほんの気持ちで十分！足りなかったらお菓子でもなんでもあるさ！』というマルチェッロの励ましでなんとかお寿司にとんかつ、卵焼き

にうどんと用意できました。そして、この晩はみんな忙しい中集まってくれ、本当に最高に楽しい festa になり、みんなの楽しそうな笑顔を見ていたらすごく幸せな気持ちになりました。そして感謝の気持ちでいっぱいになりました。

始めの頃は日本人が多すぎるのがちょっと…とっていた時期もありましたが、みんながいたから寂しくなかったし、色々と力にもなってもらいました。欲張ってあれこれやりすぎたかなと思ったけど、色々経験できてそれも間違いではありませんでした。最初は場違いかなと思った銅版画の学校では、情熱をもって一生懸命することの素晴らしさをみんなから学ぶことができました。優しい先生方や他の生徒さんの指導で、まったくの初心者だった私も最後にはフィレンツェの街を描くこともできました。



【帰国 festa で】

そして、つい先日は驚いたことにマルチェッロがイタリアから日本に遊びにきてくれたのです！！マルチェッロも私の家にホームステイして、家族と共にとても楽しい時間を過ごすことができました。マルチェッロにとって日本なんてまったく興味のない国だったのに、『ルームシェアで縁ができて日本というすばらしい国を知ることができた』と言ってくれ、本当に嬉しかったです。私自身イタリアだけでなく、日本の文化や歴史ももっと勉強したいと思い始め、日本という国のすばらしさにも気づきました。

35歳で留学なんてどんなものか…と、はじめは少し恥ずかしい気持ちもあったのですが、語学学校でも版画学校でも、私より年上どころか、すごく年配の方も勉強に来られていて、歳なんて関

係なく、夢を追ってがんばるのはすてきなことなんだと知らされ、勇気と元気をいっぱいもらいました。考え方も大きく変わったし、このイタリア留学で人生が大いに広がったことは間違いありません。まだまだイタリアへの想いは強いので、もう一度

だけ帰りたいなという気持ちでいっぱいですが、それまでは日本でがんばってもっとイタリア語を勉強し、またさらにイタリアの魅力に触れていきたいと思います。

(当館個人維持会員)

イタリア 発月刊日本語新聞



イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

お問い合わせ等はNIPPON CLUB SNC宛てにお送り下さい。

イタリア通信

第2回『知の神殿～図書館の愉しみ方』
“Tempio della sapienza”

深草 真由子

もしもインターネットが無かったら…。イタリア生活は一層不便で孤独なものになるだろう。「海外生活で無くてはならないものは？」と聞かれれば、私は間違いなく「インターネット」と答える。世の中は便利になったものである。

確かに、新聞や本を読む時間が減ったというのは本当だろう。手紙を送ることが少なくなったのも同じである。インターネットという新しい媒体の登場によって、情報を得る手段、発信する手段が変化した。この分野において最先端をいく日本に対するイタリア人の印象や驚きも主にそういったことにある。インターネット上で日記やエッセイを読んだり書いたりする行為がイタリア人の間で広まったのもきわめて最近のことである。また逆に日本人の私にとっては、イタリアの「アナログ」ぶりが新鮮に映ることもある。インターネット上に全ての情報が載っているわけではなく、載っていたとしても日本のように懇切丁寧な説明というわけでもない。知りたいことがあれば直接人に尋ねたり、勘に頼ったりしながら、多少回り道をするようになるが、そんな時も、そのプロセスを楽しむようになっている(楽しめないことも多々あるが…)。

インターネットが現代社会を一変させたのと同じように、いやもっと根本的な変革を当時の社会にもたらしたのが、十五世紀にヨハネス・グーテン

ベルクによって開発された活版印刷術であった。それ以前は修道院や工房の写字生、あるいは本を所望する者自らが原本から一字一句書き写すという手作業によってのみ書物が生産されていたが、活版印刷術の登場とその普及により、書物の大量生産が可能になり、それ以前に比べると、はるかに手に入りやすい価格で流通するようになった。こうして情報伝達のスピードと範囲が劇的に変化したのである。最も多く印刷されたのは聖書であり、ギリシア・ローマの哲学や文学作品も広く紹介されて、この新たな技術はルネサンス文化の発展を促し、宗教改革の原動力にもなった。イタリア半島内の状況に限って言えば、十六世紀初めに盛んに行われた言語問題の論争を通してイタリア語のモデルと定められた、十四世紀のトスカーナ語(韻文はペトラルカ、散文はボッカッチョのことば)のスタンダード化を大きく推し進めることにもなった。

写本からインキュナブラ(十五世紀後半に作られた揺籃期の印刷本)、十六世紀以降の印刷本と形は変わっても、書物や史料は世紀を超えた財産であり、それを所蔵しているイタリア各地の図書館そのものが文化的な遺産と言えるだろう。たとえ十分な資金が割当てられず、スタッフが不足していたり、蔵書目録のデジタルデータ化が進んでいなかったりしても、イタリアの図書館の豊かさには圧倒されるものがある。そしてそこで熱心に勉強している人たちの放つオーラにも。

たいていは鉄筋コンクリートでできた現代建築の日本の図書館とは異なり、イタリアの図書館はいかにも歴史の重みを感じさせる、趣のある建築物であることが多い。年季の入った椅子や机、天井まで高く伸びる本棚に並べられた書物、少々物

足りなくも感じるぼんやりとしたランプの灯り、一心不乱に本に向かっている若い学生や、ノートにメモを取っている教授風の男性、時折聞こえる教会の鐘の音—イタリアにやって来て間もない頃はこうした図書館の空気に飲まれ、本を探しに来たはずが、そこにいただけでも何となく満足した気分になってしまうこともあった。本来は別の用途で作られた建物が図書館として利用されていることが多いためか、書庫が歪な形の小さな部屋に仕切られていたり、二つの隣り合ったパラッツォが一つの図書館として地下道でつながっていたり、フレスコ画で壁が飾られていたりすることもある。使い勝手は良くても、無機質で個性のない日本の図書館では見られない面白さがここにはある。一番の刺激的なことは、書棚から何冊もの本を抜き取って、次から次へとページをめくって読んでいるイタリア人を見ることである。彼らのように速く、効率よく多くの情報を得ることができれば…。たとえば図書館に大量の本があっても、私が読むことのできる分量はほんの微々たるものでしかない。自分の能力と知識、そして将来できるであろうことが、いかにわずかなものに過ぎないかということを実感させられる瞬間である。

イタリアの図書館は楽しく刺激的な反面、貴重な本にアクセスするための手続きの面倒なことと言ったらない。入館するために身分証明書、そして本を閲覧するために再度身分証明書が必要になり、時々大学の先生の紹介状を求められることもある。名前や住所、タイトルと著者名を何度も書かなくてはならず、本の整理番号を見つけるのにも一苦労。開館時間が短く、はるばる朝早く電車に乗ってやってきたというのに不定期の休館日だったということも…。目的の本を手にするまでの行程は長く面倒だが、遠い過去や異なる文化を知ろうとすることは、そもそも時間も労力も要ることなのであろう。

私の印象に残っている図書館としては、まずヴェネツィアの国立マルチャーナ図書館。ヴェネツィアの中心サン・マルコ広場に位置する。観光客で溢れる賑やかな外の様子が嘘のように、図書館内には静かで穏やかな時間が流れている。岸側の閲覧室で勉強しながら、窓外の波に反射する陽の光を眺めていると、今も昔も変わらない町の歴史の一部に自分も溶け込んでいるような、ヴェ

ネツィア商人のように海を渡ってオリエントへと今から旅立つような、どこか開放的な気分させられた。もうひとつ印象的だったのはボローニャの大学図書館。大学の主な施設が集中している、ポルティコで覆われたザンボーニ通りにある。ずらっと並ぶ古めかしい棚に詰め込まれた手書きの蔵書目録や、施錠され柵で囲われた本棚に並べられた古そうな本、閲覧室の品のある机と椅子…最古の大学の町というボローニャのもつ独特のアカデミックな雰囲気も手伝って、そこに居ることだけで気持ちが高揚したものである。



【図書館の内部】

また、イタリアの数ある図書館の中でも、その芸術的な美しさと歴史的な重要性で最も有名なのはフィレンツェのラウレンツィアーナ図書館であろう。ドゥーモからすぐ近いサン・ロレンツォ教会の脇に入口があり、本の閲覧が目的でなくても、内部を見学することができる。メディチ家の所有していた書物のコレクションがこの図書館の主要な蔵書である。実際、メディチ家はたいへんな愛書家で150もの写本を所有していたコジモ・イル・ヴェッキオ以来、貴重な書籍を収集し続けた。図書館の建物自体はロレンツォ・イル・マニフィコが所望し、1523年その甥であるジュリオ・デ・メディチの注文で、ミケランジェロによって建設計画が開始さ

れた。図書館はトスカーナ大公コジモ1世のもと、1572年に一般に公開された。その時点でこの図書館が所蔵する写本の数は3000を超えていたというから、メディチ家の誇る財力は大了なものだった。また、正真正銘の文化の保護者でもあった。建築物としての図書館については、ミケランジェロがデザインした閲覧室へ上がる階段が特に有名だが、もともと彼の案ではクルミの木を用いたものであったらしい。現在見られるのはのちに別の建築家がミケランジェロの案に基づいて灰色の石で作ったものである。中央の階段に見られる丸みがミケランジェロのオリジナルの発想で、バロック芸術の先駆と見なされている。さらにラウレンツィアーナ図書館の閲覧室は部屋そのものが芸術作品のようだ。椅子付きの書見台が二列に整然と並び、各々の脇には美しい彫刻が施され、そこに収められていた写本の目録がかけられている。高級品であった写本や印刷本は鎖で書見台につながれていた。左右の書見台に挟まれた通路には朱色と白色の大理石でメディチ家の文様が施され、窓のスタンドグラスは品がよく美しい。



【ラウレンツィアーナ図書館の閲覧室】

やはりリタリアの図書館が醸し出している独特の雰囲気は、私にはたまらなく魅力的に映る。過去と現在を、中世やルネサンスに生きた人々と自分自身を結び付ける不思議な何かがそこにあるからだろうか。デジタルアーカイブや快適なインターネット環境が現代人にもたらす利便性には還元しきれない、書物や図書空間のもつ価値を再認識させられるのである。

(元会館スタッフ)

… 会館 だ よ り …

カラヴァッジョが見た夢

本セミナーでは、カラヴァッジョ研究の第一人者・神戸大学大学院准教授の宮下規久朗先生に、彼の生涯を追いながら、その作品から読み取れる彼の思い描いた『夢』に迫っていただきます。

講師：宮下規久朗(神戸大学大学院准教授)
日時：4/3,4/17,5/29,6/5,6/19,6/26(土)

(6/26は食事会を予定)

全6回(※6回トータルでのお申込)

いずれも18:00~20:00

参加費：21,000円(一般・受講生)

20,000円(個人維持会員)

会場：日本イタリア京都会館 本校

イタリア語 無料体験レッスン

4月より開講の春期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 梅田：大阪駅前第4ビル

4/4(日) 13:00~14:30

4/4(日) 15:00~16:30

4/5(月) 13:00~14:30

4/7(水) 19:00~20:30

● 四条烏丸：ウイングス京都

4/5(月) 19:00~20:30

● 京都本校：日本イタリア京都会館

4/3(土) 11:00~12:30

4/3(土) 13:00~14:30

4/7(水) 11:00~12:30

スペイン語 無料体験レッスン

4月より開講の春期スペイン語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

日時：4/7(水) 19:00~20:30

会場：日本イタリア京都会館 本校

講師：当館スペイン語講師

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>